

的外

みのる法律事務所
令和7年4月第420号



みのる法律事務所
弁護士 千田 實
〒021-0853
岩手県一関市字相去57番地5
TEL:0191-23-8960
FAX:0191-23-8950

い な べ ん だ べ ん く
田舎弁護士の駄弁句

185



こうふこう ひんぶ さ き も
不幸 貧富の差など 気持ちです
はかり じぶん なか
はかる 秤は 自分の中です

令和7(2025)年4月1日
あおぞらうきよのすて
青空浮世乃捨

令和7年は、元旦から『田舎弁護士の生き方のハカリ』3部作を書いてきました。3ヵ月かけて脱稿できました。書き終えて改めて気が付いたことはいろいろありますが、その第一は、「幸せだと思ふのも、不幸だと思ふのも、自分の中にある」という当たり前のことでした。

「自分は幸せだ」と思えば、幸せなのです。ルンルン気分になっていきます。「自分は不幸だ」と思い込んだら、どんどん落ち込み辛くなっていくだけです。「自分は豊かだ。恵まれている」と思えば、ゆったりとして落ち着いた気分になれるのです。「自分は貧しく、生活に困っている」とか「自分は知識や才能や財産などなく、駄目な人間だ」などと思い込んだら、どんどん不満がふくれてきます。

自分が幸福だと思ふか不幸だと思ふかは、自分の心の中にあるのですから、自分の心をポジティブ(前向き)に持ち、「自分は幸福だ」と思えばいいのです。自分が豊かと思ふか貧困と思ふかも、自分の心の中にあります。「過去の苦しかった時に比べれば豊かだ」、「あいつと比べたら豊かだ」と思えば豊かに思えるのです。

『生き方のハカリ』シリーズを書き終えて、『人間はどう生きるべきか』をはかるハカリは自分の中にあり、そのハカリをどのように持つか、どのように使うかは自分次第であり、その持ち方、使い方によって人生は天国にも地獄にもなるものだと確信することができました。駄弁本でも、書いてよかったという気がします。

しやうよくちそく
ことわざや 少欲知足は どこへ行く
エーアイすす ふあん つの
A / 進み 不安は募る

令和7(2025)年4月1日

あおぞらうきよのすて
青空浮世乃捨

釈迦や孔子やソクラテスの時代である2500年昔にも、ことわざや、「欲を少なくし足るを知る」という教えなどは、生き方のハカリとして大事にされていたと思います。それが今日まで「人生はどう生きるべきか」のハカリとなって、世間を導いてきました。『生き方のハカリ』シリーズを書き終えて、トランプアメリカ大統領やプーチンロシア大統領などの言動に接する度に、この人達はそのようなハカリは忘れているような気がしてならないのです。

『人生はどのようなハカリを持って生きなければならないか』という問題意識で『生き方のハカリ』を考えた結果、『究極の生き方のハカリ』は、『人を幸せにできるかどうかというハカリ』でなければならないとあらためて確信することができました。

その確信は、トランプやプーチンなどの世界の指導者を自任する権力者などによって軽視ないし無視されているのみならず、AIの進展によりどこへ行ってしまうのかという不安が生まれ、それが日々ふくれ上がっていく一方です。将棋の名人も囲碁の名人もAIに勝てないことがあるとのこと。AIは、どこまで進化するのでしょうか。

人間の力でAIをコントロールできなくなったら、人間がコントロールできない鉄人28号や鉄腕アトムのようなものができてしまいそうです。東京電力も日本政府も手のほどこしようがない福島原発事故のような、いやもっと大変なことが起きそうな気がして心配でならないのです。核のコントロールと同じように、あるいはそれ以上にAIをコントロールする生き方のハカリが必要だと確信するに至りました。

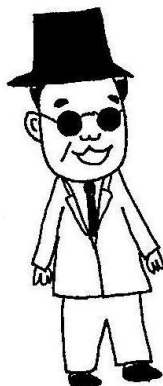
『生き方のハカリシリーズ』を書き終えて

令和7(2025)年1月1日から、『人間はどのように生きたらよいか』という『生き方のハカリ』が必要ではないかなどという考え方で、『生き方のハカリ』シリーズと題して、(1)『生き方のハカリの意義と理念』、(2)『世間が使っている生き方のハカリ』、(3)『田舎弁護士が使っている生き方のハカリ』の3部作を書き出し、令和7(2025)年3月いっぱいで一応書き終えることができました。

書き終えて今日4月1日に、前二句の駄弁句とそのコメントにその印象の一部を述べてみました。自分の駄弁本としては、硬い^{かた}ような気がします。ゆとり^{おもしろ}や面白みがないような気がします。10年前に発行した『年寄りのための童話－長生きを楽しむコツ』(2014年12月26日初版発行)を引っ張り出し、読み直してみました。

どうもこの10年の間に、人間が^{りっぱ}立派になったというか、まじめ過ぎて、^{ゆうずう}融通がきかない老人となってしまったという気がしてきました。ガンコジジイになった気がするのです。「これはいかん。チョイ悪ジジイに戻らなければならない」という思いが湧いてきました。

そこで、10年前に戻るために、10年前の駄弁本『年寄りのための童話－長生きを楽しむコツ』をこの事務所便りに^{てんさい}転載するという手抜き作業をしながら思い出して、本来の「チョイ悪ジジイ」に戻るための作業をしてみます。この事務所便りをお読み^{いただ}いている皆様には、よろしくお付き合い下さいますように伏してお願い申し上げます。いっしょに楽しんでいただければ最高です。



〇年寄りてつがくしゃは哲学者

「哲学」とは、「①真理について根本的に考えようとする学問」と角川必携国語辞典かどかわひつけいは解説しています。これでは、私には「哲学」とは何物なのかの具体的なイメージが浮かんでこないのです。「哲学」という字から、具体的なものが出てこないのです。

若い頃は、「哲学」と聞いただけで拒絶反応きよぜつはんのうが出ました。「哲学」とは、何だかよくわからない、難しい学問という印象だったのです。「医学」、「法学」、「工学」などのように、その言葉から何をする学問なのか、具体的な内容が想像できないのです。

同辞典も、「philフィロo(愛) sophyソフィー(智)ちやくこの訳語」と説明した上で、「『智ち学がく』と訳せば、まだわかりやすかったのに、熟語じゆくごの少ない『哲てつ』(大智を意味する)を使っちがくたので、日本人にはむやみにむずかしい、わかりにくい学問というイメージをもつようになった」と書いています。

その通りです。「哲学」では、何が何だかわかりません。そもそも、「哲」という字の意味がわかりません。「医」、「法」、「工」などは、われわれでもその輪郭りんかくが浮かんできます。ですが、われわれ普通人の頭の中には「哲」のイメージはないのです。

時々、人名に使われていますが、その他ではあまり見たことがないのです。角川必携国語辞典は、「①かしこくて、ものごとのすじみちがよくわかる。また、そのような大智だいち。②ものごとの奥深い道理」と書いています。

「真理について根本的に考えようとする学問」と言われても、すぐにはその意味が飲み込のみ込めません。ストンと腑ふに落ちてこないのです。普段の生活とは次元が違う世界の話のように感じてしまいます。

「哲学を学ぶ人」とか、「哲学者」などと聞くと、普通の人ではなく、普通の考え方はしない人類という気がしてしまいます。「変わり者」、「変人」というイメージもあります。「気が狂くるうほど頭のいい人」というイメージさえあります。その原因の1つは、「哲学」という言葉にありそうです。

そこで同辞典は、その後「②いろいろな経験からえた知恵をもとに行きついた、ゆるぎない信念・信条」と付け加えています。これなら理解できます。「経験からえた知恵や信念・信条なら、俺にもある」と思えて、身近に感じられます。72歳まで生きてきますと、いろいろな経験をし、知恵をえて、ゆるぎない信念・信条に行きついて

いることはたくさんあります。知恵学ならわかります。これなら語れます。子供の頃から悪いことをよく考え、「悪知恵」だけはよく働きました。

因みに、広辞苑には「フィロソフィー(philosophy)」とは「元ギリシア語で、『知を愛する』の意」とあります。元々、「哲学」と訳された「philosophy」は、「知を愛する」という意味ですから、「知恵学」とよぶべきだったのです。

「知恵学」と呼びますと、「哲学」という七面倒くさそうな学問が、途端に誰にとっても身近で、誰もが話せる学問となります。「医学」や「法学」や「工学」より身近で、専門的知識がない素人でも語ることができそうな気がしてきます。落語の世界の「トラサン」、「クマサン」、「ハッツァン」でも話せそうです。

「悪知恵」と聞いたら、それだけでワクワクしてきます。小さい頃から悪知恵はありました。「類は友を呼ぶ」で、似た者同士が集まり、悪知恵の交換をしたものです。今でも、少しの酒でその頃に戻り、楽しい時間となります。

長く生きてきますと、いろいろなことを経験します。「経験からえた知恵」なら、高齢者であれば誰でも持っています。年寄り「知恵者」です。年寄り「哲学者」ということになります。長屋の隠居などはその代表者です。親父もそういう印象を残してくれました。兄弟が集まると、「面白い親父だった」という話になります。

○私の信念は「楽しく生きる」

私は、田舎弁護士生活 45 年、長い闘病生活を経て、満 72 歳となりました。人生の前半は、面白くないことが圧倒的に多かったという印象です。若い頃は、生まれてきたことを恨みました。親を恨み、天を恨みました。「なんで生まれてきたんだ」と、悪態をつくことが少なくありませんでした。

そこから逃れようと悪戦苦闘した長い経験からえた知恵に基づき、60 歳頃から死生観、つまり「生きることとは何か?」、「死ぬこととは何か?」ということについて、少しずつ見方が変わり、最近では考えが定まってきました。哲学とは、「浮き世を楽しく生きる知恵学」と定義するようになりました。

この本では、私の哲学、つまり「この世を楽しく生きる知恵学」について述べてみたいのです。形にとらわれず、形振り構わず、「私の 72 年の人生経験からえた知恵」

というべき「楽しく生きるための知恵」について、思い付くままランダム(手当たりしだい)に述べてみます。いつか孫にでも読んでもらえたら、ジジイの役をいづらか果たすことになるような気がするのです。

「経験からえた知恵」は沢山^{たくさん}あります。形振り構わずと言っても、他人^{ひと}には恥^はずかしくて話せないこともあります。話せないことの方が面白く、役に立つことが少ないのですが、話せないのですからやむを得ません。話せることだけを話します。オフレコで、公表^{こうひょう}しない約束で話す時^{とき}がくるのを楽しみにしています。

私の哲学^{ていしつ}の骨子^{こし}は、「人生は楽しめばよい」ということに尽きています。「面白く生きる」ということですから、悪知恵^{わるちえ}も少なくありません。私は、そちらの方が得意だ^うと思います。破廉恥^{はれんち}だと思われることの中にも、面白く生きるコツが多くあります。

この世に生まれたいと思って生まれたのではありません。この世とおさらばしたいとも思いませんが、いづれ誰^{たれ}だっておさらばするのです。人生は、自分の意志で手に入れたものではありません。自分の意志で、いつまでも人生をやっているわけでもありません。

人生は、自分の意志や考えとは何の関係もなく、勝手に与えられたというか、押しつけられたものであり、勝手に奪^{うば}われるものです。こちら勝手に人生を楽しむだけです。「そっちがそうなら、こっちもこうだ」と居直^{いなお}って、人生を勝手気ままに楽しめばいいのです。神にも仏にも遠慮はいらないのです。

「こう生きなければならぬ」などというものはないので。そんな七面倒^{しちめんどう}くさいことは不要です。自分の好きなように生きればいいのです。どうせ、勝手にこの世に生み出され、勝手にこの世と別れさせられるのです。この世に義理などありません。あの世にも義理などないと思います。

好き勝手に生きようとしても、そうはいかないように仕組まれているのが人生です。どんなにもの^{もの}がいても、逃れようがないのです。「くそったれ！」という思いがします。誠に残念ですが、そのように人間はつくられているのです。そんな中でどう生きるか、ということになります。

「平成23年簡易生命表」によれば、日本人の平均余命^{よめい}は72歳男子で13.49年となっています。これはあくまでも平均ですが、72歳となった今日、この世とおさら

ばすることは、そんなに先ではなく差し^{せま}迫った問題となっています。

患者を体験し、年を重ね、いつ奪^{うば}われてしまうかわからない、「残された人生をどう生きるべきか」を真剣に考えるようになりました。その結果、「残された人生は楽しく生きるだけ」という結論に至りました。それが私の信念です。



○「面白かった」と死にたい

この世とおさらばするときに、「ああ、楽しかった」と思えれば最高です。若い頃、一時期「なんでこの世に生み出してくれた」と恨んだ両親^{うら}に対し、「ありがとう」と言いたいのです。煩惱^{ぼんのう}で雁字搦^{がんじがら}めの人生に、「知恵で楽しんだぞ!」、「面白かったぞ!」、「ざまあみろ!」と言っておさらばしたいのです。

生まれたくて生まれたわけでもなく、死にたくて死ぬわけでもないのです。どんな弾^{はず}みかはわかりませんが、この世に弾^{はじ}き出されたのです。面白可笑しく人生を楽しまなければ損です。やっていられません。「知恵学」のお陰で、今はそこまで開^{おもしろ}き直^おれる心境^{しんきよう}に達しています。

身近な人から、「あいつの人生は楽しそうだった」と言ってもらえるような、格好いい人生にしたいのです。「死に際のダンディズム」などと言っていた人がいましたが、そうありがたいものです。楽しく生きて、格好良く死にたいのです。

これは、経験からえた知恵をもとに行きついた、ゆるぎない私の信念・信条です。

難しく言えば、私の哲学です。私がこれこそ真理と考え、行きついた結論です。「残された人生は楽しむのみ」です。

この世に生まれたら、その瞬間^{しゅんかん}からこれからの先の人生は、誰にとっても「残された人生」です。余命、つまり残りの命です。1歳の子だって、これからの人生は残された命なのです。あと何年残っているかも知られていません。いつ奪われるか、全くわからないのです。それが人生です。

全く迷惑^{めいわく}な話です。だったら、「生きている間、せいっぱい楽しんでやろう」と開き直りました。「残された人生を楽しく生きる」ことには、老い^{おい}も若いもないのです。生まれた瞬間から、この哲学は生きているのです。どんなに若くても、「残された人生を楽しく生きる」という哲学、即ち「人生の知恵^{すなわ}」によって生きるべきだと確信しています。

それが、勝手にこの世に生み出された者の、せめてものレジスタンス(抵抗)です。72歳になった今、これから残された人生を生きること、この世では「長生き」ということになります。そこで、この本は「長生きを楽しむコツ」というタイトルにしました。「チョイ悪ジジイ」の悪知恵集でもあります。

特に、高齢者が「残された人生を楽しむコツ(要領^{ようりょう})」について述べてみます。この本は、高齢者をターゲット(まと)にするものです。長生きしているご同輩^{どうはい}に贈る言葉です。ご同輩に、「そう言えばそうだ」と共鳴してもらえれば嬉しいのです。「俺もそう考えてみるか」などと思ってもらえれば、「死んでもいい」という気持ちです。



10 年前の駄弁本を読み直してみました。駄文はともかく「イラストはいい」という思いがします。イラストは敬愛^{けいあい}する友、生き方の名人遠藤隆行^{たかゆき}歯科医師が大学教授とプロレスラーをしていた当時^かに描^みいてくれたものです。駄文よりもストレートに私の気持ちが表現されています。これを観てもらいたいので、10 年前の駄弁本の一部を紹介したのです。